

米欧亜回覧

第75号
発行

特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会

編集委員会

七月全体例会は、二十六日
映像で「会の歩み」を回顧し、
「新Project」について考える会

今回は、「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」をもっと多くの人に知らせるための具体的なプログラムについて、現在進行中のProjectと今後の企画について、再来年の二十周年記念事業も視野にいれながら、みんなで見出しあおう！という会です。具体的には、次の内容になる予定です。多くの皆さまの参加を期待しています。

当面の「新Project」について
一、「i-café-music」の江古田シリーズの映像による紹介



平成26年度年次総会 (4月20日)

二、「i-café-Lecture」の日比谷文化図書館コラボシリーズの紹介

三、「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」普及のための新コンテンツづくり及びIT活用でのプレゼン方式の開発について

二十周年記念事業「i-project-20」について

一、五周年記念、十周年記念事業を映像で振り返る

二、新企画「岩倉使節団の群像とその周辺の人々」の分担研究と記念出版について

定例の年次総会開催

浜矩子教授の講演「グローバルジャングルをどう生かすか」で会場沸騰!

四月二十日、学術総合センターで平成二十六年年度の年次総会が開催された。泉代表から、当会設立二十周年記念企画につながる新しいプロジェクトが有志メンバー中心に進行していることの報告があり、その後、平成二十五年度の活動報

告・収支報告、理事会で承認された理事・アドバイザー(顧問)・幹事・監事の新体制の紹介があった。

第二部は、多数の著書がありマスメディアにも度々登場している、浜矩子同志社大学大学院教授を講師に迎え、講演会が行われた。社会・経済の本源に迫りながらも期待を裏切らない舌鋒の鋭さで八十名の参加者を大いに沸かせた。

(詳細は二・三頁参照)

i-café 映像と音楽で巡る岩倉使節団・米欧回覧の旅、好評



『実記』英仏編とピアノ演奏を楽しむ (6月26日・第2回i-café)

新事業の「i-café (music)」は既に二回開催され順調に企画が進行している。各回、新会員(及び予備軍)を中心に、二十名を超える参加者があり大変好評であった。会場は「小ウイーン」の名にふさわしい素敵な雰囲気であり、ベヒシュタインのピアノの音色も素晴らしい。(別冊二頁の写真レポート参照)

岩倉使節団に同行した留学生・金子堅太郎はハーバード大学を初めて卒業した日本人であり、日露戦争の開戦と同時に米国にわたって日本の立場を訴え、セオドア・ルーズベルト大統領の斡旋を誘引し講和条約締結に貢献した人物として有名である。

訓であって、欧米の教育に応用しても少しもおかしくはない。また、ある上流婦人の会では、「私は日曜日の朝、三人の子供とバイブルを読みますが、そのあと十戒に比すべきものとして教育勅語を読んで聞かせています」と述べた。

その金子が請われて、一九〇五年、カーネギーホールでスピーチをした。当時、日露戦争に日本が連勝して米欧諸国はにわかに関心を高め、何故東洋の小国があの大国のロシアに勝っているのか、秘密を知りたがった。金子はそれに応えて「日本の教育」、とりわけ「教育勅語」について語った。満杯の聴衆は拍手喝采をし、アメリカ人にも通じる素晴らしい内容だと共鳴礼賛した。そして米国の新聞のみならず英国の新聞にも報道され、あちこちから講演の依頼が殺到することになった。

喝采を浴びたスピーチ「教育勅語」 1905年・NYカーネギーホール

泉 三郎

それから三十年を経た一九三六年、金子は明治記念館で次のような講演をしている。

金子はある教育者の集まりで、こんな感想を聞いています。「教育勅語は儒教・仏教・耶蘇教の三大教義を統一調和した深遠宏大な聖

日本のみが『教育勅語』をもつ故に神聖たりえている」と紹介している、と。「教育勅語」は初めと終わりの国粹的要素を割愛すれば、グローバル時代に通用する人類共通の「倫理」、「教育理念」と成りうるのかも知れない。

第71回 全体例会

定例年次総会が開催される、浜矩子氏講演
グローバルジャングルをどう生かすか
～国々の課題・人々の知恵

四月二十日(日)一ツ橋の学術総合センターにおいて、定例年次総会(第一部)が開催された。第二部では同志社大学大学院の浜矩子教授による講演、さらに第三部の懇親会へと続いた。第一部の総会には出席者三十八名と委任状四十八名を合わせて成立。第二部は会員とゲストを合わせ八十名の参加者あり盛況であった。

第一部の総会は近藤義彦理事(事務局長)の進行で開始、泉三郎代表(理事長)の挨拶では会が有志メンバー中心に躍動し始めていること、平成二十八年には当会の設立二十周年を迎えること、その記念となる企画に着手すること等と共に、新しいプロジェクト、新企画(i-cafe等)を



第2部は浜矩子氏による講演

開始することの説明があった。また新年度にあたり、理事・アドバイザー(顧問)・幹事・監事の新体制が理事会で承認されたこと、報告と紹介があった。理事(兼幹事)四名・泉三郎(理事長)、石垣慎信、塚本弘、近藤義彦(事務局長)、アドバイザー(顧問)二名・山田哲司、井出亜夫、幹事十二名・小野博正、小坂田國雄、多田幸子、中山進、難波康熙、岩崎洋三、庵原義文、岩澤幸紀、植木園子、小松優香、島山朔男、古俣美樹(事務局)、監事・西田親行。

そして、平成二十五年度の活動報告・収支報告(別刷参照)を石垣慎信理事(前事務局長)が行った。そのあと部会報告が続いた。「実記を読む会」小坂田國雄、「英訳実記を読む会」岩崎洋三、「歴史部会」小野博正、「グローバル・ジャパン研究会」塚本弘、「広報・メディア委員会」中山進。

第二部は塚本弘理事の進行により、同志社大学大学院教授の浜矩子教授が、「グローバルジャングルをどう生かす

か」国々の課題・人々の知恵」をテーマにした切れ味のよい講演を行なった。講演後も、時間切れまで続いた質疑にそれぞれ懇切な応答を頂いた。

(文責) 近藤 義彦

講演要旨

グローバルジャングルという言葉はある時から色々な人が使ってきているが、私は最もこだわって使っている一人。一九九〇年代になって地球を東西に分けていた壁がなくなつて、我々は垣根のないジャングルの住人になった。地球スケールの弱肉強食・淘汰の世界、それがグローバルジャングルといえる。ジャングルとは、強いものだけが生き残る世界ではなく、様々な住民がいてはじめて成り立っている。共生の生態系がプラットフォームとして脈々と生きていけるのでなければならぬ。ジャングルという場は淘汰と共生の二人三脚の場所である。

グローバルジャングルを「誰もが一人で生きていくしかない」と我々は結構誤解していた。深淵なる真理は正反対で「誰も一人では生きていけない」場所である。この共生の論理の中でアベノミクスは実にすわりがわるいと思う。「アホノミクス」の論理は自分だけが一番になるとい

う発想。安倍さんの成長戦略スピーチの中で「成長」という言葉が四十一回、「世界」という言葉が三十七回使われた。「世界」という言葉の登場の仕方が「今再び日本が世界をリードする」とか「今日本が再び世界の中央に・・・」「世界最高水準を目指す日本・・・」「世界一企業が働きやすい日本を目指す」「世界大競争に打って出る」「世界で勝つ日本」といには「世界を席卷する」といういい方までしている。安倍政権の成長戦略はすなわち世界制覇戦略であるといえる。当然、共生の生態系、グローバルジャングルの本質との相性がわるく、調和を乱す。

問題はそれだけではなく、これはものすごく伝染力の強い病で、パンデミック状態になることが一番怖い。パンデミックが世界を飲み込んだのが一九三〇年代である、やられたらやり返す、奪われたら奪い返すとうかつこうで通貨戦争・通商戦争、そしてついには本場の武力闘争(第二次世界大戦)に突入していくという忌まわしい歴史があった。

グローバルジャングルを本当に生かそうとするのであればどのような課題にこたえていくのか、どのような知恵を絞っていくべきなのかという



第2部司会の塚本氏



ことを考える前に共有したい問題意識がある。一つは、安倍政権の成長戦略の全体図は富国強兵に尽きるといふ問題点があるということ。もう一つは、経済活動が人間による人間のための営みである以上、それが人間を虐げるはずがない。したがって人間を虐げるような方向に向かっていく活動を経済活動と言ってはいけないということ。人権を踏みこむどころか人権の礎となるものでなければ経済活動と呼ばない。これがグローバルジャンルの根源的な掟である。

それを踏まえて、グローバルジャンルの住民基本心得というようなものを設定すると、グローバルジャンルを生かしていくことができる。それは、「かかげるべき合言葉」と「目指すべき場所」の二つの柱である。「かかげるべき合言葉」とは、「シェアからシェアへ」。市場占有率(奪い合い)のシェアから分かち合いのシェアへという発



浜矩子氏、泉代表と講演会の実現に尽力された方々

想に切り替えていく。「目指すべき場所」とは、「多様性と包摂性(抱きとめる力)が出会う場所」である。

我々が良き市民となってグローバルジャンルの住人となつて、奪い合いのシェアから分かち合いのシェアへと合言葉を掛け合いながら「多様性と包摂性が出会う場所」を目指すことがグローバルジャンルを生かす生き方ということになり、そういう知恵をもつて我々が国々に対して方向性を示していかないとよくないことになる。

(文責) 多田幸子・中山進 (写真) 中山進・近藤義彦
英訳実記読了後のテキストはアーネスト・サトウ

英訳実記を読む会は「米欧回覧実記」の英訳版『The Twakura Embassy, 1872-1873』全五巻百章を二〇〇三年一月以来毎月読み続けて来たが、十一年二ヶ月後の本年二月にやっと読了した。三月の読了祝賀会の席で、次なるテキストとしてSir Ernest Satowの *Diplomat in Japan* (一外交官の見た明治維新) を取り上げようということになった。英語を読みなれた勢いを駆って、英書で岩倉使節団そして幕末・維新が外からはどう見えたのかを探ろうという主旨である。サトウは日英修好通商条約

調印直後の一八六二年(文久二年)に来日したイギリスの外交官(当初は日本語通訳生)で、初代公使オールコック、二代目パークスの下で幕府・明治新政府との交渉に当たった。一八八四年から九五五年までは他国(シヤム、ウルグアイ、モロッコ)勤務となったが、一八九五年に特命全権公使として再来日し、日本滞在は通算二十五年に及ぶ。条約改正等に絡んで岩倉具視はじめ使節団関係者との交流も少なくない。外から見た語部として最適人物の一人であろう。

輪読会の今後の進め方は、①月一回、原則として第三水曜日十四時開催とする。②毎回一章づつ輪番で音読した上で、論議する。③月当番を定め、当番を中心に進行し、後半は当番の選んだトピックについて報告・意見交換する。

③Tan Nish ed. *The Twakura Mission in America and Europe* や萩原延壽「遠い崖」アーネスト・サトウ日記抄」等も参照する。④会場はルノールが手狭になったので、六月以降は日比谷図書文化館セミナーホールで開催するなどをきめた。

(文責) 岩崎 洋三
講演会 明治日本を創った岩倉使節団、神戸で開催
 四月十九日、神戸市立博物館

館の講堂において、泉代表による米欧亜回覧の会の神戸講演を行った。講演の題目は『堂々たる日本人！明治を創った岩倉使節団！初代兵庫県知事・伊藤博文を中心に』とした。

神戸市教育委員会の後援を得て、神戸市の中学校に保護者帯同で講演会への参加を狙い、広くビラを配布した。講演参加者は五十七名を数えたが、中学生は部活が四月から始まったため、期待ほど参加数が少なく熟年層が中心となったものの、好評を得た。講演後、ボランティアガイド

による神戸疎開地の歴史散策を実施し、伊藤博文が回覧に出发する前の知事時代に、疎開地で起きた外交問題として処理した「神戸事件」の跡なども見学した。講演前に、泉代表と関西支部の会員の交流や意見の交換の場を持った。

(文責) 難波 康熙
☆新会員自己紹介☆
 新たに会員となった方の自己紹介です。

大久保啓次郎
 私はサラリーマン時代を十四年前に卒業いたしました。その後母校の創立者福澤諭吉の研究をしております。但し、福澤諭吉を縦軸に、横軸として福澤諭吉に関係のあった人物の歴史にも取り組んで

います。まとめると「日本の近代思想史」(幕末〜維新)の研究となります。

その一環として岩崎洋三さんのご紹介で「米欧亜回覧会」の「歴史部会」に参加させて頂くようになりました。参加されている皆さんは大変な勉強家で私の研究にも大いに役立つております。当面は歴史部会以外にはあまり興味はないのですが、会員の皆様との接点を多くしたいと考えて、登録させて頂くことになりました。

大田京子

私は、前から、国際交流、文化、芸術、科学、歴史等の分野に関心がありました。そして今もあります。皆様、どうぞよろしくお願い致します。二〇一四年、初夏。

大野紗知代

この素敵な地球に舞い降りてから六十四年が過ぎました。綺麗なお姉様にお誘いを受け、米欧亜回覧の会に入りました。稚拙で頭が悪くて甘えん坊な私がいては困りになると思いますが、よろしくお願ひいたします。デカルト、カント達は十三才位で自我の確立が出来ておりましたのに、私は今が思春期なのです。好奇心旺盛で勉強心に燃えております。そして反抗心にも。ポエムも書いております。

グローバルジャパン研究会報告

担当幹事 塚本 弘



hiroshi.tsukamoto@eu-japan.jp

■家庭教育を考える(講師:永池栄吉氏)

四月五日開催、出席者十六名。永池氏は公益社団法人スコレ家庭教育振興協会会長、スコレとはギリシャ語でレジャーとス

クルの意味。戦後日本は、GHQの自由、人権、議会主義、開かれた市場があつて経済大国を實現したが、その裏返しに家の解体と個の解放が薦められた結果、本来の個人主義は、国家主義に對峙するはずが、家族の中の個人に歪曲されて、子供も両親と對等と勘違いされて親の權威が失われる結果を生んできた。昔からの日本の基層文化(慣習、祭りなど)が否定され、日本の伝統的な添い寝、おんぶ、抱っこなども、昭和三十九年の母子手帳から良くないこととされた。これは、日本的な親子のコミュニケーションであつて、欧米では、ハグ、キス、アイ・ラブ・ユウなど愛情表現で補っている部分を日本は捨て去ってしまったことにな

余を要した。人類はその発生から、メスとしての母親一人の子育てから、父親が現れ、家族の誕生があつて人類となったことが忘れられている。家族の愛情があつて初めて人間性が生まれるのだ。男女平等も、その言葉に捉われる結果が、家庭内で誰が子どもに責任を持つのかが疎かにされてきた。戦前のような、家庭内の権力は母親、權威は父親のパターンが崩れ、子供が親の言うことを聞かなくなった。子供は無闇に叱つても言うことを聞かない。躰には共感力が必要である。普段から、子供の長所をしつかりほめる。その上で、必要に応じて叱る。愛情に裏打ちされた叱りは、子供はちゃんと聞く。親の言葉より、普段の親の態度を見られている。親は、説得力・感化力と叱る技術を磨かなければならない。親の影響は母親の胎内から始まっているので早期教育は親の潜在意識を健康にする意味もある。質疑応答では、欧米の宗教に代る、倫理観の教育には、論語の素読のような、会津の「十の掟」、萩の「松陰語録」の音読などの有効性。母子家庭での父性に、先生や周囲の人の代役の役割。共稼ぎ夫婦の子育ては難問である

が、親が自分で育てるのが当たり前前の社会にするためには、十年余の子育て後でも職場復帰できる社会風土の醸成が必要だろう。いじめは、昔は異質の排除であつたが、今は多くは加害者の愛への飢餓感から生じる。愛されていないと感じる子供も、遊びや運動、祭りや菜園などによる子供同士の連帯があると防げるが、その環境が益々薄れている現状への不安も多く提議された。

(文責) 小野 博正
■日本の財政・税制を考える(講師:山田哲司氏)

五月十日開催、出席者十五名。報告は、①前回の論点の整理と復習(主として財政問題)②前回以降の新資料(平成二十六年度予算)の紹介と問題点 ③税制の変遷・歴史と現状(今回のメインテーマ)の三点について行われた。①財政問題については、政治家の意識改革の重要性、議会の予算チェック機能の欠陥、予算編成時の官僚制の弊害、などが再び議論となった。しかしながら、財政赤字については必ずしも有効な対応策を議論するには至らなかった。②平成二十六年度予算(三月末に成立)については、四月以降の消費税引き上げ結果が

盛り込まれた新資料により説明がなされたが、①との関連もあつて、消費税引き上げ(八%、十%)で本当に社会保障関係費が安定的に確保されるのか、今後法人税減税が議論されることであるが、その不足分の財源がどう確保されるのか、プライマリーバランスの維持は可能かなど多くの疑問が提起された。③税制について、報告では、明治の地租改正以来、経済・社会の進展に合わせて変遷を遂げてきているが、本当中立性・公平性を担保してきたのだろうか、財政との関連で、現行の税制は中・長期的展望に立った安定的な財源(税収)となつているのだろうか、今後予想される国際化への対応などの問題提起がなされた。討論では、消費税については、国民番号制度の是非、貧富の格差、中小企業問題についての言及があり、また他の税制(たとえば資産課税、環境課税、相続税など)の是非についても議論がおよび、時間いっぱいまで熱心な意見交換が行われた。財政・税制はかなり専門的ではあるが重要な分野であり、本研究会でも時間をかけて、論点を絞った議論をして行く必要があると思われる。

(文責) 山田 哲司

歴史部会報

担当幹事 小野 博正



mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

■徳富蘇峰 | 明治・大正・昭和、三代の言論の軌跡(講師:吹田尚一氏) 吹田氏による二週に亘る講演、三月十七日二十名、二十四日十七名が参加。二〇一三年は、蘇峰生誕

百五十周年にあたり、『稀代のジャーナリスト徳富蘇峰』も出版され、今、改めて注目されるのは、日本現近代の伴走者として、常にその先頭に立つて政論をリードしてきたイデオログであった。明治初年に、『国民の友』『国民新聞』を創刊、平民主義と薩長閥反對を唱えて登場。やがて大日本膨張論者として日露戦争を正当化し日露講和に賛成して変節者といわれ、昭和になると大東亜戦争開戦詔書に二度も手を入れる立場に立ち、軍国主義者に協力した超国家主義者にして、戦犯にも指名された人物。天皇中心主義者でありながら、戦後は、昭和天皇責任を論じ退位を迫る一方で、生涯に百五十冊の著作を成した蘇峰を語ることで、そのままが日本近現代史の総括にもつながるという問題意識である。

この一見矛盾した生き方に、吹田氏は、一貫した反抗精神と手堅さをみる。それは吉田松陰、横井小楠、佐久間象山を範とした「純乎とした泰西主義」を堅持しつつ、欧米の帝国主義に対抗して日本が生き残るためには、日本も対外膨張するしかない皇室を中心にしたプラグマティズムを主張したという。

蘇峰は『東京裁判宣誓供述書』の中で「感化を受けた人物に、横井小楠、新島襄、勝海舟と父徳富湛水、そして母の遺訓を挙げ、革命家としての吉田松陰を評価、日本国民は平和愛好民族であり、世界侵略など夢思わず、自衛自存して、国際社会の仲間入りをしたかっただけ」と、帝国主義全盛の情勢の中で、日本の行動はやむを得ないと自己弁護する。また、『頑蘇夢物語終戦後日記』で、敗戦の原因は、①統帥者がなく②下剋上の風土で、上層部は「よきに計らえ」の無責任体制③昭和天皇の統帥責任④日本人の内向きで、外交下手⑤発信せず文化を受容するのみの体質⑥明治維新以降人物の小物化⑦全体構想を描く人がいないし育てなかつた⑧支那事変の愚かしい戦争継続⑨形式かつ独自の官学教育(知識のみを学び、知恵を学ばない)⑩いまだ敗戦の総括がなされていな

いと、現代にそのまま通じる問題意識を早くから指摘している。また『時務一家言』(大正二年)に、米国の外交は国際的無遠慮・無頓着で、他人迷惑を気にせず、自己の欲するところを無遠慮に遂行する。内にはモンロー主義、外には門戸開放を徹底する一方で、世界一でない気が済まないとみており、現在の米國をよく予言している。坐して平和は来ないから、満蒙経営に打って出て、南進も辞さずとの帝国主義は日本の生きる道だという一方で政党政治、官僚政治の限界をすでに述べている。平民主義、帝国主義、社会主義を皇室中心主義の下に行うべしという。このような言動には明治・大正・昭和の三代九十四歳の生涯を終えるまで、ある種の貫性があり感嘆するが、やはり異論のある者も多かるう。

蘇峰の戦後直後の予言「米國が日本を誘導し、援助し、文化的にも経済的にも日本を開発していけば、日本の復興は世界の眼を驚かすほどに迅速であるかもしれぬ。十年を待たざる内に、日本は最も頼もしき米國の友國として、同時に東亜の重鎮になるだろう」は見事で、この見識が戦前から發揮されていればとの思いに駆られる。

(文責) 小野 博正

■明治十四年の政変とは(講師：大久保啓次郎氏)

四月二十一日開催。

明治維新以後、明治政府の専制主義的な政治に対する不満から、全国各地で「佐賀の乱」や「萩の乱」等の内乱が勃発したが、明治十年の西南戦争を最後に一段落した。世の中が静かになった頃を見計らって福澤諭吉は、明治十二年七月二十八日から八月十四日まで十一回にわたって、郵便報知新聞の社説に「国会開設運動が俄かに活発化し、自由民権運動に発展した。同じ年(明治十二年)に福澤諭吉は『民情一新』を発刊し、同書の中で、英国型立憲政体の特徴を述べて、それを強く推奨していた。

明治十三年には交詢社を立ち上げ、福澤の門下生たちは、いわゆる「交詢社私擬憲法」を策定し議論していた。(國王)(天皇)は君臨すれども統治せず)

そのような日本国内(文明開化思想が蔓延している世の中)の動向に、儒教思想に基づく天皇の権力保持思想を持つていた井上毅は、強い危機感を抱いた。

『明治十四年の政変』とは、自由民権運動の高まりの中で、政府内での国会開設&憲法制定に関する議論と、官有

物件払下げに関する反対運動の二つが、時期的に絡み合った結果、一旦決定した払下げは中止となり、国会開設と憲法制定の方針が決まり、大隈参議とそれに繋がる人脈(主として福澤門下生)が政府から追放された事件である。同時に、国会開設と憲法制定が議論される過程を利用して、井上毅が、福澤諭吉の文明開化思想を完全に葬り去る事に成功した事件でもある。

(文責) 大久保 啓次郎

■日露戦争、資金調達との戦い(講師：板谷敏彦氏・昨秋の空融の世界史の講師再登場)

五月十九日開催、出席者二十二名。日露戦争と言うと、司馬遼太郎の『坂の上の雲』の影響もあって、二百三高地や日本海海戦の華々しい攻防による軍功による勝利との印象があるが、日露戦争の戦費の八十五%は外債・国内債の公債で賄われており、資金調達なくして勝利はあり得なかつた。板谷氏は、原資料に当たること、タイムズ紙百年分、外務省外交電文を精査され、ロンドン市場での日露の評価の推移を検証し、次第にロシアの起債が難しくなる過程を解明した。

戦争の長期化による資金不足を心配した伊藤博文・井上馨は、ロンドン市場での資金調達に、時の日銀副総裁・高

橋是清と随伴・深井英五を派遣、米國にはルーズベルト大統領の学友でもある金子堅太郎を日本の立場の説明(宣伝)に送る。日本とロシアは、外債起債の最低条件である金本位制を共に一八九七年に採用、日本はロンドン市場で、ロシアは仏独市場で起債を狙うが、当時日露のGDPは一对三(人口比では略対等だった)、日本の国力への信頼薄く、戦争も勝つとはだれも思っていない。開戦時の日露の国債スプレット(金利差)は3%と開きがあり、日本は不利で、ロンドン市場は冷たい。だが、高橋や駐英公使林董らの努力で、米國でモルガンに次ぐ、財閥のクレーン・ロープグループの社主・ユダヤ人・ジェイコブ・シフをその気にさせて、アメリカのユダヤ財閥などに仲介(セコンダリー)で、公債引き受けが実現。その後、戦況が日本有利になると起債は次第に容易となり、ロシアとのスプレットも最後は同列となつて戦時中に四回起債。五、六回目はロスチャイルドも買手がなつた。又、鉄道が戦争に果たした役割や、帆船・蒸気船の発達史と戦争など、講師の多角的、且興味深い視点からの示唆に富む指摘も大いに楽しめた。

(文責) 小野 博正

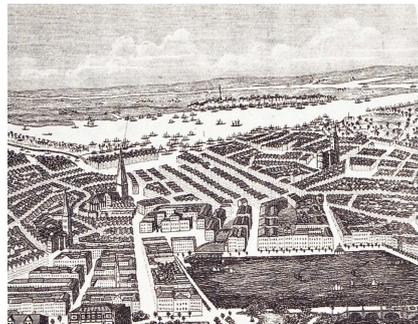


実記を読む会報告

担当幹事 小坂田 國雄

Tel&Fax 044-987-1531

osakadakunio5256@jcom.home.ne.jp



ハンブルグの全景 (実記)

東プロイセンに入った。木戸副使一行は、使節団から別れ、ベルリンからウイーン万博に行つて開会式に出席し、次いでイタリヤ、スイス、ドイツ、フランスなどを独自に視察・観光しながら、岩倉一行より四十日あまり早く帰国した。

■第百八十一回 四月十日開催、出席者十八名。『第69巻 北ドイツ前記』『第70巻 北ドイツ後記上』『第71巻 北ドイツ後記下』

使節団一行は、ロシアのサンクトペテルブルクから汽車で、彼らは思わずこの三日間のあまりにも大きな気候と風景の移り変わりに驚き、「三日間に三春を閲す」すなわち「三日間で初春・仲春・晩春の時を経た」と記し、汽車の旅の面白さもここに極まると言っている。一行は、市の西北にある花街も視察し、このハンブルグで売春宿を公認しているのは、本当に有利な制度なのかどうか疑問を呈している。

使節団一行は、この後、デンマーク・スエーデンを2週間ほど訪ね(第67、68、69巻)、また北ドイツのリューベックに戻ってきた。その後、五日間かけて、ハンブルグを再訪し、ホルスタイン、ブレーメン、ハノーバー、カッセル、フランクフルト、ザクセン等を巡り見聞を広めている。その中で、「ヨーロッパでは、いろいろな人々が民族や種族によつて郡や村を形成し、容貌や言語も風俗も異なつていて、互いにその特質を發揮し、簡単に他の郡村と一緒になるのを好まず、その風俗を守つて互いに切磋琢磨して進歩している。」と述べたり、「ヨーロッパ人は、私有財産への欲望が概して熾烈で、君主も家臣もこの欲望を遂げようと必死になっている。」と皮肉っているのは、久米達が武士階級出身の

為かと推察する。

■第八十二回 (文責) 小坂田 國雄

五月八日開催、出席者十七名。『72-73巻 南ドイツの記』及び『イタリヤの略説』

バイエルン/ミュンヘンといえは、「北日耳曼(ゼルマン)トハ異種ニテ言語汚濁ニ、風俗ヤ、奢麗ナリ」と久米が特徴づけたこの地を使節団一行が巡回してから、その約四十年後、第一次世界大戦が勃発(一九一四)、曲折を経て(一九一八)ドイツ降伏ノ大戦終結。パリ講和会議。ヴェルサイユ条約(ドイツ人の誇りを傷つけた!!)、続く二十年間の「戦間期」のあと、折からの不況を追風に、「ウイーン生まれ、ミュンヘン育ち」の偉大なる凡人で恐るべき鬼才A・ヒットラーによる第二次世界大戦の惹起。折しも「第一次世界大戦」開戦百年目にあたる本年(二〇一四)、欧州のみならず我邦においても「第一次世界大戦論」「ヒットラー流儀」などの言辞しきり：など

などは知る由もないわが使節団一行は市内見物の後、五月七日夜十一時、ミュンヘンを出発、オーストリアのインスブルックを抜けてイタリヤに向かう。

翌五月八日夜明け頃、南アルプス「ブレンネル峠」の景

観を久米が秀抜に綴る、「インニス堡駅ヲスキル後二車窓年(タチマ)チ闊ク、又明ナルニ驚キテ、首ヲ挙レハ、汽車ハ正ニ山中ノ洞道ヲ馳行セリ」。一行の約九十年前、同じ峠を三十七才のゲーテが馬車で辿つていたことが『イタリヤ紀行』での文章で知られるが(翻訳のせいか)叙景文は全く平凡で、仮に森鷗外の翻訳ならどんな名文になるだろうかと、など想像を逞しくさせられる。

さて、わが使節団の「イタリヤの第一印象」と覚しき次の文章がある、『古語二曰、沃土之民情ト、不易ノ諺トイフヘシ、北方諸国トハ、頓ニ異俗ヲ覚ユルナリ』。使節団はミラノに立寄つていない。レオナルド・ダ・ヴィンチのあの「最後の晩餐」を見なかつたのは惜しまれる。一行の約三十年前、英作家ディケンズは「例の絵」を見ており、「今は原画の美しさが、殆ど残つていない、が：構成の壮大さは興味と威厳に満ちた作品たらしめるのに十分である」(『イタリヤのおもかげ』)と寸評している。

五月九日、使節団は早暁、車中二泊の強行軍をこなし、フライレンツェに到着した。

『6章、フライレンツェ、ローマ(上下)』

一行は一八七三年(明治六年)アルプスを越えて、統一後つい先日まで首都であった「花の都」フライレンツェへ。紙幣がフライレンツェ、ローマ、ナポリと三様で、交換レートも異なることに驚く。花の大聖堂やウフィツィ美術館に古の繁栄を想い、「利潤は勤労の価にて、名譽は精勉の効なり」と細工ものや陶器、養蚕に優れていること、我が国に異ならず」と評価。

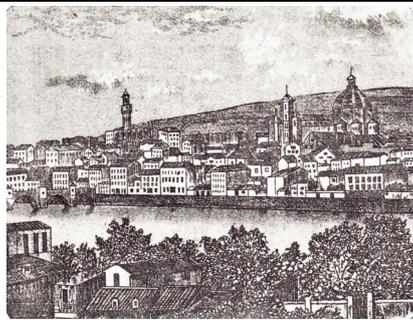
一方で、ローマにはいり「アルプス以北の国に比べ、土沃にして、民に惰状あり」「塵埃飛び、貧兒多し」と嘆く。また、漢の武帝の時代、マルクス・アウレリウスとの交流、教皇と皇帝の争い(カノッサの屈辱)、ルターの新教改革などに想いを馳せ、サンピエトロ寺院、パンテオン、カタコンベなど遺跡を巡つて歴史を語る。とても歴史的、文化的に興味の尽きない旅の三章である。そこで私は、新しい会員(特に女性)を意識しつつ「特別番外編」として、すこし本題をはなれるが歴史のみならず、文化・芸術のイタリヤを考えてみた。

『A歴史』①四百年前イタリヤを旅した日本人(天正四少

■第八十三回

六月十二日開催、74、75、

(文責) 桑名 正行



アルノ川とフィレンツェの町 (実記)

年、支倉、ペトロ岐部) ②アステカ(コルテス)、インカ(ピサロ)、日本(ザビエル以下)の対比 ③ガリバルディと西郷隆盛 ④イタリア理想の企業城下町(クレスピダツダ)と日本(富岡から女工哀史、) 「B言語」 ①世界の言語樹 ②人類文明五千年の流れ ③ラテン語はどう伝わったか(六ヶ国語対比) ④ラテン語のことわざに学ぶ 「C文学・音楽」 ①モーツアルトとゲーテのイタリア紀行 ②須賀敦子と巡るイタリア(塩野七生と比較しつつ) 「D美術」 ①一目瞭然、絵画の流れ(ルネッサンス、バロック) ②我が心の画家たち(その一点) ③イタリア美術館巡り 「E映画」 ①イタリア映画の四名匠 ②名画で味わうイタリアの風土 ③懐かしの映画音楽ベスト百(ニーノ・ロータがすごい)、

と一項目一枚の資料化を試みたが、時間の都合で概要紹介におわった。次回十月にナポリ、ベネツィアの章とあわせて説明しようと思つてい(文責) 芳野 健二

■第一回
四月十六日開催、新規入会四名を含む十人が出席。
序文と第一章「江戸在勤の通訳生を拜命」を読んだ。サトウは十四歳でロンドン大学に入学し、十八歳の時外務省の日本語通訳生に採用された。それ以前にオリファント著「エルギン卿遣日使節録」(Narrative of The Earl of Elgin's Mission to China & Japan in the Years 1857, 58, 59) を読んで日本に魅入られていた。エルギン伯は第二次アヘン戦争(アロー号事件) 指揮官として中国に派遣されていたが、ペリーが日米修好通商条約締結したとの情報で急遽訪日し、一ヶ月遅れで日英修好通商条約を結び、日英外交の先駆けになった人物。著者のオリファント(注) は私設秘書としてエルギンに随行していた。

Sir Ernest Satow,
A Diplomat in Japan 輪読会
担当幹事 岩崎洋三
Tel & Fax 03-3488-0532
y-iwasaki@isr.or.jp



サトウは先輩外交官の勧めで、来日直前に中国でシナ語を学び、数百の漢字を覚えた

が、中国人が日本からの書簡を理解できなかったこともあつて、サトウ自身はシナ語の学習は日本語学習に不可欠のものではないとしているのは面白い。

また、中国に派遣されていた英国外交官を品定めして、試験成績が良いものが必ずしも実績を上げていないこと、知識があつてもモラルがなければ役に立たないことなどをズバリ言つてのけているのは印象的だ。江戸湾に到着した日が快晴で残雪を残した富士が遠望できたこともあつて、「これにまさる風景は世界のどこにもあるまいと思つた」と表現し、あこがれた日本への到着を喜んでい(注) オリファントは、サトウ来日の一年前一八六一年にオリコックに招かれて一等書記官として再来日する。しかし、来日直後に第一次東禅寺(英公使館) 事件に遭遇、刀傷を負い帰国を余儀なくされた。

■第二回
五月二十一日開催、第二章「横浜の官民社会」を採り上げた。今回は、予め、レジュメを出席(予定)者に20頁文書として送信することとした。前もって読んで戴く方が何かと利便性が高いと判断したためである。

発表者は、第二章の要約に加えて、幕末の「金」流出事情

を描いた日銀(金融研究所)のリーフレットとサトウの数ヶ月前に赴任した医師ウイリアム・ウイリスに関する佐藤八郎氏(元鹿児島大学医学部長)による短い評伝を添付した。

本書の第三章までは、英国人を対象にした幕末までの日本紹介が主であり、生麦事件、薩英戦争等の記述はないため、後半は発表者発案の自由課題を扱う旨の提案が初回時にあつた。そこで発表者は、ウイリスが鹿児島医学学校で教鞭を執るに至った経緯、その高弟に高木兼寛がいたことを踏まえ、後に、高木と森林太郎(鷗外)との間で繰り広げられた所謂「脚氣論争」を採り上げた。ちなみに、サトウが着任した文久二年は森が生まれた年である。事実上、これは「論争」というよりは、海軍と陸軍+東大医学部、英国医学とドイツ医学、さらには薩摩と長州という確執が禍となり水掛け論に終わる。しかし、疫学的研究によつて経験的事実の集積に努め、結果として脚氣を撲滅した海軍と、「学理」がないというだけの理由で戦時において白米支給を強行し莫大な脚氣被害を被つた陸軍を対比し、最後に、明治四四年に発表された鷗外の『妄想』を紹介して「軍医」としての森の姿勢を問うた。

(発表者) 赤間 純一

関西支部報告
担当幹事 難波 康熙



namba@jttk.zaq.ne.jp

■第七十三回
五月十八日開催、出席者八名、英国編巻名、英国編巻パーミンガム
英国政府がこのような過密な見学予定計画を組んだものであろうが、その工場見学を分担しながらも全て丹念にこなしてい

く使節団には、日本の近代化への鬼気迫るまでの執念と氣迫を感じる。

使節団一行は英国をほぼ一周するが、工場見学を兼ねながらチェスター州まで戻つて来た。そこでは工業都市マンチェスターの拡大で不動産関係で事業家としても成功し、政界にも地位を築いているジェントリー階級(準貴族)の富豪の歓待を受ける。

英国編の副読本としてのグローバルヒストリーの視野で書かれた「イギリス帝国の歴史」(秋田茂著)で、当時の大英帝国の経済力という視点で世界における位置を知る意味で世界のGDP比重の変遷を覗いた。日本も千七百年の江戸中期には既に国力は充実しており、意外であるが産業革命以前にあつた英国よりも日本のGDPは大きかつた。

(文責) 難波 康熙

特定非営利活動法人

「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。
- 会員** 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例会** 年に4回、全体例会があります。
- 部会** テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会費** 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。
- 事務局** 「米欧亜回覧の会」事務局担当 古俣美樹
〒190-0001
東京都立川市若葉町 1-24-30-7111
E-mail: info@iwakura-mission.gr.jp
TEL/FAX 042-534-9295

入会申込

入会申込書はホームページと事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払いは下記のゆうちょ銀行口座への払込(振込)をご利用ください。

00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ 等
また、書籍・DVD案内もあります
<http://www.iwakura-mission.jp>

*お知らせ欄も時々チェックしてください



<催し案内>

2014年7月～9月の予定です

☆全体例会

日時：7月26日(土) 13:30～16:30 (開場13時)
テーマ：当会のもつ貴重な教材や人材を生かして
「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」をもっと
多くの人に知らせよう!

場所：同志社大学東京オフィス
京橋イーストビル3階 03-6228-7260

会費：1,000円

懇親会：[はなの舞] 京橋店 参加費 4,000円

☆実記を読む会

日程：7月10日(木) 14:00～ 多田氏 歴史DVD
9月11日(木) 14:00～ 大森氏 第67～69巻

場所：国際文化会館401号室

会費：1,000円

☆Sir Ernest Satoh, A Diplomat in Japan 輪読会

日程：7月16日(水) 14:00～ Ch.4 市川氏
9月17日(水) 14:00～ Ch.5

場所：日比谷図書文化館(9月は国際文化館)

会費：1,000円

☆歴史部会

日程：7月22日(火) 「森鷗外」(池央耿氏)
時間：13:30～16:30

場所：国際文化会館401号室

会費：1,000円

☆グローバルジャパン研究会

日程：7月12日(土) 13:30～16:30

テーマ：日本の教育を考える—中等教育・高等教育を
各国との比較から(大森東亜氏)

場所：国際文化会館401号室(会費：1,000円)

☆i-café-lecture

日程：8月25日(月) 14:00～

場所：日比谷図書文化館セミナールームB

☆関西支部

日時：7月13日(日) 14:00～16:00

テーマ：『実記』輪読、グローバルヒストリー研究会
場所：大阪弥生会館

編集後記

◇今号の新会員自己紹介(三頁)は三名です。昨年の七十二号以来、四号続けて新会員自己紹介を掲載することができ、少しずつですが確実に会員増の傾向にあります。

◇一月五日の新年会「音楽で巡る岩倉使節団の旅」の盛り上がりや、音楽を媒介として初心者には馴染みの薄いDVD「岩倉使節団の米欧回覧」を見る機会を提供しながら、くつろいだ雰囲気の中で「実記」について知り、学び合う新事業「i-café」が好評で、再来年の二十周年記念事業の基礎の一つができています。中心となっているのは、新年会で司会を務めた岩崎洋三氏、そして自らもピアニストである植木園子さんで、両人のネットワークによって、質の高い内容と多くの集客を実現することができました。

◇「i-café」は、江古田のクラインネス・ウィーンの協力を得て開催できましたが、これを基に色々なグループ・団体・組織とのコラボレーションの企画案も構想されています。これらが議論される七月全体例会のテーマは米欧回覧の会そのものです。

◇ヴェテランの方、そして新会員の方の参画とアイデアが求められています。(N)

米欧亜回覧の会 平成25年度(2013年度)活動報告 (平成25年4月～平成26年3月)

	全体例会	実記を読む会	英訳実記を読む会
平成25年 4月	第67回(4/14) NPO年次総会 講演会「米国流アベノミクスの盲点」 上村達男氏	第171回(4/11) 第52巻・第53巻・第54巻 オランダ	第113回(4/18) Ch.91 Climate & Agriculture of Europe
5月		第172回(5/9) 第49巻・第50巻・第51巻 ベルギー	第113回(5/23) Ch.92 European Industry
6月		第173回(6/13) 第55巻・第56巻 プロイセン	第114回(6/20) Ch.93 European Commercial Enterprise
7月	第68回(7/25) 講演会「国政選挙の理想と現実」 保阪正康氏	第174回(7/11&12) 映画鑑賞と納涼の集い(奥多摩園)	第115回(7/7) Ch.94 Voyage thru. The Mediteranean
8月		夏休み	夏休み
9月		第175回(9/12) 第57巻・第58巻 ベルリン市	第116回(9/18) Ch.95 Voyage thru.the Red Sea
10月	第69回(10/13) 講演会「金融資本の跋扈—21世紀になぜ 金融システムは肥大化したのか」板谷敏彦氏	第176回(10/10) 第59巻・第60巻 ベルリン市	第117回(10/17) Ch.96 Voyage thru. The Arabian Sea
11月		11月は中止	第118回(11/22) Ch.97 The Island of Ceylon
12月		第177回(12/12) 久米の名語録 1	第119回(12/19) Ch.98 The Bay of Bengal
平成26年 1月	第70回(1/5) 新年会 「音楽でめぐる岩倉使節団の旅」	第178回(1/9) 久米の名語録 2	第120回(1/22) Ch.99 The Chinese Sea
2月		第179回(2/13) 第42巻・第43巻 パリ市	第121回(2/19) Ch.100 Hong kong & Shanghai (全100巻読了) *2003年1月以来11年2ヵ月かかった。
3月		第180回(3/13) 第61巻・第62巻 ロシア国 第62・63・64・65巻 サンクト・ペテルブルグ市	読了記念祝賀会 於 如水会館

	歴史部会	グローバル・ジャパン研究会	広報・メディア委員会	関西支部
平成25年 4月	『日本の対外発展「転機」を 巡って—大東亜戦争への道』 吹田尚一氏(4/21)			第66回例会(4/27)
5月	『大東亜戦争とは何であったのか』 吹田尚一氏(5/19)			第67回例会(5/30)
6月	『勝海舟—江戸城無血開城の 英雄にして倒幕の仕掛け人』 小野博正氏(6/17)		会報71号	第68回例会(6/29)
7月	『福沢諭吉—そのアキレス腱を問う』 泉三郎氏(7/19)			
8月		『日本をどんな国にしたいか』 (8/24) 『征天的進歩主義から 順天的科学へ』(9/7) 泉三郎氏		第69回例会(8/24)
9月	『福地源一郎—セカンドベストの 探究者』 五百旗頭馨氏(9/27)	『日本の安全保障と憲法問題』 塚本弘氏(9/28)	会報72号	
10月	『加藤高明—その外交政策と 政党政治の光芒』 吹田尚一氏(10/21)	『潤いのある家庭と美しい 個性豊かな列島へ』 泉三郎氏(10/18)		第70回例会(10/12)
11月	『新島 襄』 多田直彦氏(11/18)	『東日本大震災後の原子力問題と 電気事業制度』 井上雅晴氏(11/9)		第71回例会(11/13)
12月		『日本の近代化から見た歴史認識 とグローバル社会に於ける 日本の役割』井出亜夫氏(12/14)	会報73号	
平成26年 1月				
2月	『榎本武揚—変革の時代の 万能ピンチヒッター』 岩崎洋三氏(2/17)	『財政と税制を考える』 山田哲司氏(2/8)		第72回例会(2/8)
3月	『徳富蘇峰—3代を生きて』 吹田尚一氏(3/17—3/24)	『新しいJAPANを創る』 西川武彦氏(3/8)	会報74号	第73回例会(3/22)

平成25年度(2014年度) 会計収支報告

平成25年度
特定非営利活動にかかる事業
会計収支計算書

平成25年4月1日から
平成26年3月31日まで

特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会

収入の部

入会金(4名分)	20,000
年会費	549,000
寄付金	2,000
講演会等事業収入	933,817
その他(受取利子)	224
当期収入合計	1,505,041

支出の部

講演会等事業費	896,243
会報発行印刷代	80,850
郵送費・託送費	97,460
電話・通信費	102,000
会議費	83,129
事務用品費	133,458
事務委託費	230,000
当期支出合計	1,623,140

当期収支バランス

期首現金・預金残高	946,621
当期収支バランス	△118,099
期末現金・預金残高	828,522
(内訳)	
手許現金(事務局合計)	(140,198)
郵便貯金	(688,324)

i-café 映像と音楽で巡る 岩倉使節団・米欧回覧の旅 写真レポート

会場 音楽サロン クライネス・ウィーン (西武池袋線 江古田駅)

【第1回】アメリカの旅 5月29日(木)より



岩崎洋三氏の司会と解説



DVD「岩倉使節団の米欧回覧」上映

<プログラム>

- ①DVD「岩倉使節団の米欧回覧」を見る
- ②旅の記録「米欧回覧実記」原文の朗読
(格調高い読み下し漢文の名文です)
- ③音楽
- ④懇談(コーヒーやワインを傾けながら)

■第1回 i-café 報告

はじめに、DVD「岩倉使節団の米欧回覧」の1章から3章(アメリカ編)を觀賞、各章ごとに泉代表の原文朗読と解説があり、その後のミニコンサートは、フォスターの懐かしい曲からウェストサイドストーリーまでの楽しく心に残るプログラム。

参加者から、DVDは、大変新鮮で興味深く、岩倉使節団に関する関心を改めて持った、「米欧回覧実記」の存在も知ることができてよかったとの感想が多く聞かれました。(植木園子)

【第2回】英仏の旅 6月26日(木)より



ソプラノ 森美智子さん(右)
ピアノ 植木園子さん(左)



泉三郎氏「米欧回覧実記」原文の朗読

【第3回】欧亜の旅 7月24日(木) (予定)

(写真) 多田直彦氏

